

三つの世界初

リュミエール映画「蝦夷のアイヌ1」、「蝦夷のアイヌ2」

フランス、リヨンの工業家リュミエール兄弟は、映像人類学に貢献する二つの重要な発明を行っている。1895年のシネマトグラフは世界で初めて動画像を大きなスクリーンに投影するものであった。劇映画製作への重要な第一歩でもあるが、世界中の様々な民族の暮らしぶりを生きいきと伝える記録手段ともなった。もう一つは1903年の最初期のカラー写真技法オートクローム・リュミエールだ。動画の記録手段とはなりえなかったが、アルベール・カーンの「地球映像資料館」の72,000点の静止画が遺された。シネマトグラフの発明は大きな反響を呼び、彼らは世界中に操作するスタッフと機器一式を貸し出すシステムを編み出した。リヨンへの留学時代よりリュミエール兄弟の友人だった京都の染料輸入商、稲畑勝太郎は、リュミエールの代理人として契約し、1897年、技術者や装置と共に帰国した。シネマトグラフは、映写機を組み替えると撮影機にもなった。リュミエール社の世界中に派遣された技術者たちは任地で上映活動の傍ら、さまざまな事物を撮影した。こうして初めて記録された明治期日本の事物の中に、アイヌの男性と女性の踊りが含まれている。撮影したのは、リュミエール社のフランス人技師コンスタン・ジレルであるが、残念ながら彼は撮影をした集落名を書き記さなかった。室蘭に行ったことは、はっきりしているが、つてとしてはフランスの宣教団を頼ったとされるが、それから先、何処へ向かったのか？今もって不明である。

「科学映画の起源」3部作から「金星の太陽面通過」と「トレーヌ海峡先住民」

イタリアの科学映画作家で国際科学映画協会(ISFA)の会長を長く務めたヴィルジリオ・トジは、1970年代に、ユネスコのために「映画と科学研究」というレポートを作成し、その後も調査を続け、初期科学映画史を、「リュミエール以前の映画」1984年にまとめた。93年にはドイツ・フランス・イタリア・イギリス4か国の国際プロジェクトとしてフィルム版「科学映画の起源」3部作を完成させた。英文版の「映画以前の映画」2005年が、文字資料としての最新版である。今回は日本あるいはアイヌ研究と関わる、二つの「世界で初めて」ショートクリップを紹介する。

時間を追って変化する現象を記録し、繰り返し再生して研究する学術映像の最初の試み

フランスの天文学者、ジュールス・ジャンセンは、1873年に翌年の金星の太陽面観測に備え、それを連続写真に記録しようと装置を開発した。時計装置で回転するダゲレオタイプの沃化銀円盤の辺縁に定時的に太陽面を連続記録していく世界初のタイムラプス撮影の試みとされている。パリの映画博物館にはその試作機が世界初の映画装置として展示され、ロンドンの科学博物館にも記録盤が展示されているが、その金星観測が実施されたのは、長崎市の金毘羅山で、観測成功の記念碑と太陽追尾装置(ヘリオスタット)を置いた土台が、長崎県指定史跡にもなっている。それは明治時代のごく初めに高名なフランス天文学者が来日し、そこを観測地を選んだからであって、そこが世界初の学術映像の撮影地となったとは、全く認識されていない。記録装置が如何様なものか良く知られていないためのようだ。

フィールド調査に映画カメラを携えた最初の試み

英国ケンブリッジ大学のアルフレッド・コート・ハッドンは、1898・99年のトレス海峡先住民の人類学調査に英国のニューマン=ガーディア製の映画カメラを携行した。彼らはフィールドに7か月間滞在したが、撮影に充てられたのは最後の3日間だけだった。というのも携行したカメラは現地到着までに破損してしまい、修理に送り返さざるを得なかった。新しいカメラは迎えの船が届けたのだろうか？現存するのは、わずかに呪術的な踊りと火錐による火起しの映像に過ぎない。一方、音声記録は順調にワックス・シリンダー約100本が録音され、オーストラリア国立アーカイブに保存されている。この映像を二風谷で上映するのは、ハッドンの随行者の中に若い内科医チャールズ・ガブリエル・セリグマンがいたからである。セリグマンこそ、1929年に英国王立人類学協会(RAI)会長として夫妻で来日した際、ニール・ゴードン・マンローの二風谷でのアイヌ研究に映画手段を投入することを強く推し、マンローの指導教官となった。長崎の金毘羅山から始まった科学映像の小径は遠くオセアニアの辺境を經由して、ここ二風谷まで続いているのだ。

誰が撮ったか「日本の滅び行く民族アイヌ」

この英国映画協会(BFI)国立映画 TV アーカイブス所蔵のフィルム断片は、運営が終わって久しいオックスフォード大学社会人類学教室マークス・バンクスらが立ち上げた映画誕生から50年間の社会人類学的に有意義な映画作品の所在情報データベース・ウェブサイト「HADDON」において、1910年代前半に沙流川流域で記録されたものとされていた。BFIによると、この映画断片の寄贈者はスイスのイエズス会で、ドイツ語字幕版であるが、トップクレジットの「セリグ・ポリスコープ」は、当時シカゴに存在した製作会社である。

一方、同時期、北海道で調査活動していた人物に、シカゴ大学教授の日本学者フレデリック・スターがいる。彼は助手に映画を撮らせたというが、未だ彼と関連するアイヌの映画は見つかっていない。この画像が、スターと関連するという確証はないが、可能性はあるかとも思う。フレデリック・スターは、白老に行っているし、平取に詳しいジョン・バチラーからも色々な助言を得ていたことが知られている。

19世紀末から20世紀初めは帝国主義の時代だった。欧米列強各国は海外に植民地を経営し、そこで得た文物を収集して博物館に陳列して、競って自らの成果を誇った。映画はそうした繁栄を誇示する格好のツールだった。またこの時代はジャポニズムの時代でもあり、日本は欧米諸国の興味的でもあった。西欧人からアイヌが注目されたのは、彼らにアイヌが極東の人種的孤島に生きる白人種の一員であり、怒涛のごとく押し寄せる黄色人種の大波に飲み込まれようとしているという幻想があったからだ。そこでの決まり文句が、「滅び行く民族」なのである。

この映像を入手した当時、英国へ行って BFI で直接保存フィルムを調査する機会が無く、技術的には英国側にお任せとなったが、サイレント・フレームの 35mm フィルムを、アカデミーフレームゲートで、24コマ/秒ドライブでテレシネするという杜撰な作業をされた。デジタル処理で速度修正を行ったが、画面の失われた部分は、いかんともし難い。